



TITLE:

図書館の建て物

AUTHOR(S):

平岡, 武夫

CITATION:

平岡, 武夫. 図書館の建て物. 静脩 1973, 9(3): 1-2

ISSUE DATE:

1973-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36706>

RIGHT:

図書館の建て物

平 岡 武 夫

京大の現在の図書館は古びている。玄関も暗すぎる。いまはない旧図書館も、私が入学した時すでに古びていた。書庫はさらに甚しかった。その書庫は今もある。女子職員はお化け屋敷という。積年の重みに耐えかねて、二階の床がしばって危ない。館長は心配のしどおしである。現在の図書館は昭和17年に建てられた。物資が欠乏していて、やっと配給されたセメントの類を軍需省などが取り返しに来たのを、羽田・鳥養先生らが頑張りとおして、三階の予定を二階に縮小したけれども、とにかく竣工されたと聞いている。信念と苦心の成果である。私はこの図書館を誇りに思う。無骨なまでにどっしりしているのも心強く、また天井の高いものなかなか気持ちよい。しかしすでに30年を経過している。戦時中の建て物は古びるのが速い。

私はまず表口を明るくしようと思った。旧知の増田教授に相談した。親切なこの友人は早速に図書館に来て、私の意見に同調してくれた。しかし現場を見るにおよんで、“全体的に構想しなくては、ここだけ手を入れてもイメージ・チェンジにはなりません”と突き放された。専門家は無情である。膏藥を張るような仕事はお嫌いらしい。

結局、私たちがしたことは、壁に電子時計一つをかけて、アクセサリと正確な時報を兼ねさせただけである。もともと三層を二層にしているのである。しかも情報と図書館業務とは、量的にも質的にも無際限に発展する。雑誌室を階上と階下に二分しているような現状では、到底、図書館の責任は果せない。機能面からも新しい物を建てねばならない。方々の大学でもどしどし新築をしている。京大はむしろ乗り遅れているかのようである。しかしそのために幸せなこともある。あるべき図書館像が次第にはっきりしてくるからである。玄関を広くとり、明るい吹き上げを造ることも例を加えている。書庫内に快適なステーションを設けて請求票と書物の出納にニューマチックシートとベルトコンベアを使い、重い書物をかかえて暗く狭い階段を昇り降りする労苦から解放する設備も試みられている。学ぶ所が多い。

また学習図書館としての設備は相当に充足されたから、これから研究図書館としての体制を加えるべきであろう。それは教授たち個々の研究者に閲覧室を提供するというのではない。学部または機関を超えて特定の課題を共同研究する時に、その場所と資料を提供するのである。場所としては、資料室と研究室を設備する。資料の方は、当面の研究に必要な資料

を、コピーも使って、学内・学外から網羅する。利用者は随時に来て利用する。共同研究もここで行なう。一定期間の後、その研究が終ると、原位置にもどすべき資料はどのように処置され、廃棄してよいものは廃棄する。そしてあいた書架と研究室が次の共同研究のために提供される。それぞれの研究に共通して必要な機器類は、無論、備えつけられる。コンピューターを利用するための場所も考慮しておかねばならない。

図書館の基準面積を蔵書数と学生数だけで計算している時代では、もはやなかろう。

(附属図書館長)

———ご存じですか

教養部図書室の業務休止

教養部図書室は、昨夏から新図書館の建築がはじまっていましたが、一応、完成したので、このほど移転がはじまりました。そのため、すでに2月21日(水)から閲覧業務は休止となり5月4日(金)まで閉室となります。

教養課程の学生の方で、もし特に、他学部の図書を利用したいときは、教養部閲覧掛にご相談ください。新営図書館は5月7日(月)に開館予定ですが、当分の間、利用は閲覧室、自習室および開架図書(約2万冊)となります。

———大学図書館界のうごき

七大学附属図書館協議会

七大学附属図書館協議会は、秋季に開催されるのが恒例であるが、本年度は当番館の九大図書館の新築工事のため、48年1月24・25の両日福岡市で開催された。おかげで、参加者一同は、九大の関係者の方々の苦勞の成果である新図書館を見学できるという、この上ない好機に恵まれることができた。ただ残念なことは、いろいろの都合で、新図書館の内部の備品が整わず、したがって、この図書館で果されるべき本格的な活動を見学できなかったことである。

今年の協議会の議題には、期せずして、中央図書館のあり方に関する議題が、多くの大学から提案された。これは、七大学のような規模の大きい大学においても、学内全般の図書館施設および活動がようやく完成してくるにつれて、これまで全学的な総合図書館として、学習図書館的機能も研究図書館的機能も、未分化のまますべて担当してきた現状に対する反省からであろう。各大学の実情に応じて、中央館はどのような機能を充実していくべきかについて、活発な議論が重ねられた。もちろん、各館どこにでも適用できるような、中央館のあり方についてのパターンを結論的に導き出すことはできないが、大規模大学における中央図書館のあり方が機能的に問われたことは、注目に値すると思う。

本館からは、「中央館の研究図書館としてのあり方について」という議題のほかに、目下他の方面でも検討が進められつつある図書館の予算問題を、大規模大学図書館の立場から検討する意味で、「中央図書館予算のあり方について」という議題を提出した。図書館予算の問題については、国立大学協会においても審議がすすめられているし、一方、国立大学図書館協議会でも、調査がすすめられつつある。この問題については、理想案・現実案といろいろな考え方があるが、参加館の予算問題に対するとり組み方の実情がそれぞれ報告され、きわめて有意義であった。